

弱さの人間学

オンライン

—「弱さ」の方から「わたし」を問う—

通年・火曜2講時(10:45~12:15)

KMC派遣宣教師・立命館大学非常勤講師

パク
シネ

私たちは弱肉強食の社会の中で生き残るために、必死に自分の弱さを押し込み、ひたすら強くあろうと努力しつづけています。しかし、弱さは強さの対極にある克服すべき単なる「強さの欠如」というよりも、むしろ死を運命付けられている存在として人間すべてに通じる普遍性であります。このような認識からこの講座では、自分の弱さを欠如としてとらえるのではなく、それをまず普通と考え、そういう「弱さ」の方から自分のあり方を再考します。

〈春学期〉「弱さを生きる」

自分の弱さを全て否定するのではなく、「弱さを生きる」ことの意味や価値を様々な角度から問い、その中に光を見出していきます。

〈秋学期〉「死を生きる」

死と関わる様々なテーマを取り上げて、死への存在としての「わたし」をいかに生きるかを共に考えます。

■募集人数

20名

■テキストなど

『死の力 -死と向き合う教育-』（朴シネ著、晃洋書房、2015年）

そのほか、必要に応じて適宜紹介する。

■必要な費用

特になし

■注意事項

本講座はオンライン会議ツールの「Zoom」を利用します。接続環境は各自で用意してください。

この講座は通年で開講されますが、**春学期のみ、または秋学期のみの受講も可能**です。受講者の人数、経験などによって、授業の内容や順序は変わることがあります。欠席についてはできるだけ、連絡してください。



回	講座内容（受講者の人数、経験などによって、授業の内容や順序は変わることがあります。）
春学期 「弱さを生きる」	1 自分の弱さと向き合う旅への招待
	2 自分の弱さへのまなざしについての一考察 -「私とは何か」という問いへの答えとしての絵画「自画像」を手掛かりとして-
	3 弱さについての人間学的考察① -弱さをもつ英雄の物語を手掛かりとして-
	4 弱さについての人間学的考察② -支える支えられる関係の反転について-
	5 外向型人間 vs 内向型人間 - Susan Cain 「Quiet: The Power of Introverts in a World That Can't Stop Talking」を手掛かりとして-
	6 急情はなぜ批判されるのか - Bertrand Russell 「In Praise of Idleness」、Ulrich Schnabel 「何もしない時間のパーワー」、丸岡いずみ 「休むことも生きること」を手掛かりとして-
	7 善と悪の間を生きる存在としての私 - 吉野弘の詩における人間の不完全さ (=弱さ) へのまなざしを手掛かりとして-
	8 「幼」と「老」の間を生きる存在としての私 - 「大人」の世界の対極としての「幼」と「老」を生きることの人間学的意味-
	9 病む存在としての私 - 病の経験から生まれるもの-
	10 弱さを生きる - 映画「怪物はささやく」を手掛かりとして考える-
秋学期 「死を生きる」	11 「死を生きる」とは何か - 映画「ゼロ・グラビティ」を手掛かりとして-
	12 「三人称の死」と悲嘆の作業 - 映画「ものすごくうるさくて、ありえないほど近い」を手掛かりとして-
	13 「三人称の死」という意味づけにおける暴力性について - 映画「ホテル・ルワンダ」「少しの我慢」を手掛かりとして-
	14 子どもと死 - 映画「アラビヤにかけの橋」を手掛かりとして-
	15 教育と死 - 大淵敏昭「いのちの授業」を手掛かりとして-
	16 老いと死 - 老いを生きることの人間学的意味を考える-
	17 葬儀と死 - 映画「サウルの息子」「裸の島」「おくりびと」を手掛かりとして-
	18 宗教と死 - キリスト教の死の意味を中心として-
	19 ユーモアと死 - 死への恐怖と不安を乗り越えるためのヒントとしてのユーモア-
	20 私の死を生きる - 映画「エンディング・ノート」を手掛かりとして-